

Book Review 23-2 日常の謎 #不思議な時計

『#不思議な時計』（北村薫著）を読んでみた。著者は、小説家、推理作家。エッセイやアンソロジー編纂も手がける。高校の国語教師をしながら『空飛ぶ馬』でデビュー。日常の謎を鮮やかに描く推理小説で人気を博す。『鷺と雪』で直木賞受賞。

映画、詩歌、演劇、父との思い出などが章ごとに話題が移ってゆく9編。前の章の謎が謎を呼び、好奇心が好奇心を呼び起こして次の章へ移ってゆく。例えば、一番初めの「不思議な島」という章で、著者は、古本屋の店先で、「猟奇島」というタイトルのDVDを見かける。そこから、江戸川乱歩の『パノラマ島奇談』、『現代猟奇尖端図鑑』、佐藤春夫の「探偵小説小論」へと探索を続け、韓国映画「猟奇的な彼女」、エラリー・クイーン、はたまた、フランク・キャプラの『群衆』（amazonで注文したらサイレント映画であった）にまで飛翔する（映画は14本、小説、書籍、雑誌などが25本登場）。読んだ本や観た映画のことをよくもこんなに覚えているものだと感心する。もうどこにもないと思えるような本を所蔵していて、必要に応じて引っ張り出してくる。

特に萩原朔太郎、江戸川乱歩の話題が多い。朔太郎の遺品を前橋文学館に寄贈した時計のエピソードが出てくる章がある。その時計についての探索が興味深い。「宮さん、宮さん」という歌で時を知らせるといふものが、そうではないらしいと判明する。そして、学芸員も加わって探索が続く。どんな結末になるのか。

ちょっとした日常の謎に拘り、それを探索する著者の姿勢に感心してしまう。蔵書を嵩張るといふ理由で捨てられてしまった私からすると、立派な蔵書を待つ著者が羨ましい限りである。

萩原 朔太郎について

1886年生まれ。詩人で評論家。「日本近代詩の父」と称される。幾多の高等学校で退学を繰り返す。北原白秋の雑誌『朱鸞』に初めて「みちゆき」ほか五篇の詩を発表し、詩人として出発。また「ゴンドラ洋楽会」を組織してマンドリンやギターを教授し、群馬県内で演奏会を開催する。32歳で、第一詩集『月に吠える』を感情詩社と白日社共刊により自費出版で刊行。内容・形式共に従来の詩の概念を破り、口語象徴詩・叙情詩の新領域を開拓し、詩壇に確固たる地位を確立。1927年頃から三好達治、堀辰雄、梶井基次郎などの書生や門人を多く抱えるようになる。1939年にパノンの会を結成。『帰郷者』（第四回透谷文学賞受章）、『港

にて』、『阿帯』を刊行する。この頃から身体に変調を感じ始め、55歳で死去。